

伝西行筆和泉式部統集の原形

日本文学／講師 岸本 理恵

一、はじめに

伝西行筆和泉式部統集は、「高遠大式集」と外題された二十丁程の残欠本（以下に「高遠集外題本」と称する）が田中親美氏により明治四十四年に複製されて以来、本文の詳細な研究を経て、榊原本をはじめ現存する和泉式部統集の祖本であることが確認されている。当初はこの複製本にのみ依った研究であったが、その後、ツレの関係にある「大式三位集」と外題のある本（以下に「大式三位集外題本」と称する）や古筆切が発見・公開され、現在では和泉式部統集六百四十七首のうち五百九十首余りが確認できるようになった。この本文もやはり榊原本に多く一致するので、伝西行筆和泉式部統集が現存統集の祖本であることは疑いないものとされている。現存状況は、次のとおりである。

大式三位集外題本 墨付八十三丁

高遠集外題本 墨付二十一丁

古筆切 四葉（二丁分）

これら現存する伝西行筆統集が榊原本の祖本であるとされるのは、歌や詞書の本文のみでなく次に挙げる点が一致するからである。38番詞書「宮の御四十九日、誦経の御そものうたする所に……」に対して、伝西行筆本には定家による勘物が、「二品彈正尹為尊親王、長保四年六月依病出家薨」と書き入れられており、榊原本

もこの勘物を持つ。105番歌は榊原本が「ねもたえすあしのをふらんかたをみ」で途切れ、「本ノマ、」としている。伝西行筆本（大式三位集外題本十九丁表）でもこれと同じく「本」と傍書して下句を欠き、一首二行書で書写される本文の下句に相当する一行を空白としている。また、伝西行筆和泉式部統集は他の和泉式部統集諸本にない歌は含まない。こうしたことから、伝西行筆本が榊原本をはじめとする現存和泉式部統集の祖本であることは疑いないものである。しかし、大式三位集外題本と高遠集外題本は錯簡箇所を多く含み、その錯簡の有様は綴じ誤りという程度のものではない。丁の入れ替わりのみでなく、丁の表裏においても現存統集とは続き方の異なる箇所が複数あり、場合によっては意図的な綴じ直しがあるのではないかと見受けられる。そのような甚だしい錯乱状態を、果たして榊原本の歌順に復原しうるものであるかという問題は、未だ検証されることがないままである。祖本であるならば復原できるはずであり、復原できないのであれば祖本という扱いができないことになる。本稿では、現存する伝西行筆和泉式部統集について、錯乱状態を復原し、榊原本の祖本たり得るかどうかを明らかにしたい。なお、本稿で用いる大式三位集外題本・高遠集外題本および古筆切の書誌や影印は、特に断らない限り吉田幸一氏『和泉式部集定家本考 上下』^①によるものである。

二、高遠集外題本の転写本

伝西行筆和泉式部統集の復原にあたり、高遠集外題本からの転写本について先に触れておきたい。大阪市立大学学術情報総合センター森文庫の所蔵本と、岡山大学附属図書館池田家文庫の所蔵本の二本が知られている。それぞれの書写は、森文庫本は目録によると江戸中期、池田家文庫本は土肥経平の書写奥書に宝暦五年（一七五五）とある。特に森文庫本は吉田幸一氏『和泉式部全集 資料編』²²に翻刻され、その本文が広く知られる。いずれの本も、外題・内題ともに「高遠大式集」と記し、高遠集外題本巻末にある冷泉為清の識語をもち、本文も臨模本というわけではないが高遠集外題本に一致する。ただし、現状の高遠集外題本にはない本文が九首にわたり見られるため、親本たる高遠集外題本が紹介されているにもかかわらず、この転写本が重視されるのである。

具体的には、高遠集外題本では333番歌の次に354番の詞書の途中からの本文が続いている。転写本はこの間に334番から338番と350番から354番詞書の冒頭部分までの本文をもつ。これは吉田氏が指摘するように、伝西行筆和泉式部統集が高遠集外題本となつてから、その第一括目の中央に位置した一紙を切り取られたために欠いている本文で、切り取られる以前に転写された森文庫本や池田家文庫本といった転写本にはこの本文が残っているのである。もう少し詳細に、森文庫本によって確認すると、森文庫本は和歌一首二行書で、334番から338番の箇所は二十行、350番から354番の箇所も同じく二十行ある。高遠集外題本も一首二行書、一面の行数は九十一行。よつて二十行は一分分に相当し、転写本に残された本文は二丁（四面）分である。問題の箇所は、三丁裏の最終行が333番歌下句、続く四丁表一行目が354番詞書の途中からで、丁の切れ目に当たっている。したがって、この九首は高遠集外題本に本来あったものと見ることができ、【表1】の状態を想定できる。高遠集外題本は江戸中期頃にはこのような本文をもっていたものであり、これらの転写本は高遠集外題本のツレというものではないが、伝西行筆和泉式部統集の復原には補つて考えることができるものである。

【表1】高遠集外題本第一括

(丁数) (歌番号)		転写本にあり
表	裏	
1表	白紙	↑ 転写本にあり ↓
1裏	白紙	
2表	白紙	
2裏	313-315	
3表	316-318詞	
3裏	331-333	
	334-? ?-338	
	350-? ?-354詞1行	
4表	354詞2行-356詞	
4裏	367-369	
5表	370-373詞	
5裏	424-426詞	
6表	339-342	
6裏	347-349	

三、現存本の錯簡状況

このように、伝西行筆和泉式部統集は、大式三位集外題本・高遠集外題本・古筆切・高遠集外題本の転写本から本文を集めることができる。錯簡が甚だしいと言われる伝西行筆和泉式部統集の、現在確認できる和歌を集めてその状況を一覧表にしたものが【表2】である。また、これを現在の装丁とは切り離し、榊原本の歌順に並べると【表3】のようになる。

この表から、次の三点を見て取ることができる。

- ・大式三位集外題本では第一・二・三・四・五・七・八括に錯簡や切り取りがなく、第六括のみにある。【表2】1
- ・大式三位集外題本は、全六百四十七首からなる榊原本に比較すると、その

初めと終わりの部分の本文をもち、高遠集外題本は途中の部分である。

- ・錯簡は高遠集外題本に著しい。【表2】2・3

つまり、著しい錯乱状態を示すように見えても錯簡は全体に及んでいるのではなく、大式三位集外題本においては大部分が榊原本と一致しており、ここに問題はない。錯簡のある大式三位集外題本第六括と高遠集外題本（全三括）が問題となるのである。これらについてももう少し詳しく現在の錯簡状況を表にすると、【表4-1】～【表4-4】のようになる。これをもとに、錯簡を榊原本のように戻すことができるのか、できるとすれば復原した伝西行筆和泉式部統集はどのような形となるのか、以下に復原を試みよう。

【表 3】伝西行筆続集の錯簡状況（歌番号順）

（記号）	（歌番号）	（現状）
A	001-309	三位
B	310-313 詞	三位
C	313-317 詞	高遠
D	318-320	三位
E1	325-326	古筆切
E2	327-330	古筆切
F	331-333	高遠
G	334-338	転写本
H	339-342	高遠
I	347-349	高遠
J	350-354 詞 1 行	転写本
K	354 詞 2 行 -356 詞	高遠
L1	364-366	古筆切
L2	367-373 詞 1 行	高遠
M	373-375 詞	三位
N	375-384 詞	高遠
O	389-399 詞	高遠
P	399-401	古筆切
Q	402-404 詞	高遠
R	410-412 詞 1 行	高遠
S	412-414	高遠
T	415-424 詞	高遠
U	424-427 詞 2 行	高遠
V	430-437 上句	高遠
W	440-448 詞 1 行	高遠
X	450-452	三位
Y	453-472 上句	高遠
Z1	477 下句 -484	高遠
Z2	490-513	三位
Z3	514-533 詞	三位
Z4	533-647	三位

※A-Z の記号は、錯簡箇所を歌番号順に並べ替えた際の、それぞれの前後関係を示す。吉田幸一氏『和泉式部集定家本考』に合わせているが、吉田氏未見の古筆切については、前後する部分の記号を利用して E1・E2 などのように番号を補った。

【表 2】伝西行筆続集の錯簡状況（現状）

1 大式三位集外題本

（記号）	（歌番号）	（括）
A	001-309	第 1 括-第 5 括
Z2	490-513	
M	373-375 詞	
D	318-320	
Z3	514-533 詞	
X	450-452	第 6 括
B	310-313 詞	
Z4(1)	533-552	
Z4(2)	553-647	第 7 括-第 8 括

2 高遠集外題本

C	313-317 詞	第 1 括
F	331-333	
K	354 詞 2 行 -356 詞	
L2	367-373 詞 1 行	
U	424-427 詞 2 行	
H	339-342	第 2 括
I	347-349	
N	375-384 詞	
O	389-399 詞	
R	410-412 詞 1 行	第 3 括
Q	402-404 詞	
T	415-424 詞	
V	430-437 上句	
S	412-414	
W	440-448 詞 1 行	第 3 括
Y	453-472 上句	
Z1	477 下句 -484	

3 高遠集外題本転写本

G	334-338
J	350-354 詞 1 行

4 古筆切

E1	325-326
----	---------

5 古筆切

E2	327-330
----	---------

6 古筆切

L1	364-366
----	---------

7 古筆切

P	399-401
---	---------

復原される伝西行筆和泉式部続集の装丁は、綴葉装であろう。その理由は、一つには、大式三位集外題本も高遠集外題本も、現在は綴葉装として伝わっていることがある。特に、大式三位集外題本では八括のうち七括に錯簡がない。これは本来の形をそのまま伝えていいるものと見てよいだろう。もう一つ、伝西行筆和泉式部続集は、定家監督書写本であるが、定家監督書写による私家集には綴葉装となっていないものが比較的多いことがある。綴葉装の場合、一つの丁を移動させる

四、伝西行筆和泉式部続集の復原

【表 4-3】各括の状態
高遠集外題本第二括
(丁数) (歌番号)

①	7 表	375-378	N
	7 裏	379-381	
	8 表	382-384詞	O
	8 裏	389-391	
	9 表	392-393	R
	9 裏	394-396	
②	10 表	397-399詞	Q
	10 裏	410-412詞	
③	11 表	402-404詞	T
	11 裏	415-416	
④	12 表	417-418	V
	12 裏	419-421	
⑤	13 表	422-423	
	13 裏	430-432	
	14 表	433-434	
	14 裏	435-437上	

【表 4-1】各括の状態
大式三位集外題本第六括
(丁数) (歌番号)

	54 表	490-494	Z2
	54 裏	495-499	
	55 表	500-502	M
	55 裏	503-505	
	56 表	506-508	D
	56 裏	509-510	
①	57 表	511-513	Z3
	57 裏	373-375詞	
	58 表	318-320	X
	58 裏	514-515詞	
	59 表	516-519	B
	59 裏	520-523	
	60 表	524-526	Z4
	60 裏	527-529	
②	61 表	530-533詞	
	61 裏	450-452	
	62 表	310-313詞	
	62 裏	533-535	
	63 表	536-538	
	63 裏	539-541	
	64 表	542-545	
	64 裏	546-547	
	65 表	548-550	
	65 裏	551-552	

【表 4-4】各括の状態
高遠集外題本第一括
(丁数) (歌番号)

①	1 表	白紙	C
	1 裏	白紙	
②	2 表	白紙	F
	2 裏	313-315	
	3 表	316-318詞	G
	3 裏	331-333	
③		334- ?	J
		? -338	
		350- ?	K
		? -354詞	
④	4 表	354-356詞	L2
	4 裏	367-369	
⑤	5 表	370-373詞	U
	5 裏	424-427詞	
⑥	6 表	339-342	H
	6 裏	347-349	
⑦			I

※現状では歌番号が連続せず問題となる箇所には、各括ごとに①～⑦の番号を付した。

【表 4-2】各括の状態
高遠集外題本第三括
(丁数) (歌番号)

①	15 表	412-414	S
	15 裏	440-442	
	16 表	443-445	W
	16 裏	446-448詞	
②	17 表	453-455	Y
	17 裏	456-458	
	18 表	459-460	
	18 裏	461-462	
	19 表	463-465	
	19 裏	466-467	
	20 表	468-469	
	20 裏	471-472上	
③	21 表	477下-480	Z1
	21 裏	481-483	
④	22 表	484-白紙	
	22 裏	白紙	

とき、一紙の反対側にある丁も伴って順序が入れ替わるので、一つの錯簡であっても離れた二箇所連続しない部分ができ、大幅に本文が乱れてしまう。③
また、定家監督書写本の綴葉装は多くが両面書写となっており、伝西行筆和泉式部続集も、現在の装丁では両面書写である。ところが、伝西行筆和泉式部続集の錯簡には、【表 4】に見たように、一つの丁の表裏に起こったものもある。このことから清水文雄氏は、伝西行筆続集の原形について片面書写の大和綴であった可能性を指摘する。^④しかし、これは、丁の表裏を一度剥いだものを再び装丁したと見るべきであろう。

両面書写の綴葉装となっていたものを古筆切として解体するにあたり、表裏を剥いだものは多く見られる。表装に際して台紙に貼り付けてしまう側に文字を残しておくよりも、表裏を剥いで二枚にすれば、二倍の古筆切ができる。穂久邇文庫所蔵の『風葉和歌集』桂切は、もと綴葉装の両面書写の冊子を、表裏を剥がして一頁分ずつに分割し、裏打ちをして、古筆切として手鑑に押すばかりとしたもの五十四枚が桐箱に一括して収められている。⁵⁾ 伝西行筆和泉式部統集も、一部がこのような、丁の表裏を剥がして古筆切に分割しようとした経緯があるのではないか。

具体的に伝西行筆和泉式部統集の錯簡を見ていこう。併せて、古筆切となったものも適宜補っていく。まずは、最も錯簡の少ない大式三位集外題本第六括。先の【表4-1】で明らかのように、問題となる箇所は次の二箇所である。

① 五十七丁裏と五十八丁表は、前後に500番台の和歌が並ぶ中にM(373)375(詞書)とD(318)320が入っている。

② 六十一丁裏と六十二丁表には、前後に500番台の和歌が並ぶ中にX(450)452とB(310)313(詞書)が入っている。

錯簡があるとはいえ、①の前後の並びは五十七丁表が513まで、五十八丁裏は514からとなっており、問題のMとDを除けば連続するものである。MとDを除いた場合、榊原本に比べても詞書や歌に切れ目や過不足はなく、本来は五十七丁表が五十八丁裏へと続く一丁となっていたはずのものである。したがって、この一丁の表裏を剥いでその内側にできた白紙の面にMとDを貼り付けたと見ることができよう。

②についても同様に、歌番号は六十一丁表から六十二丁裏へと続くものであり、その間に全く別の箇所の和歌をもつXとBの二葉が加えられている。表裏を剥いだ間に貼り付けたものであろう。

こうして見るとM・D・X・Bの四葉を加える前、つまり、①②の表裏を剥ぐ以前の形に戻してみると、この括に錯簡はなくなる。しかも、四葉を除いた状態でこの二箇所を見ると、この錯簡は第六括の四丁目と七丁目、つまり第四紙目に起こっていることに気づく。①と②の二箇所の錯簡は、大式三位集外題本第六括の第四紙目に加えられた一つの変化によるものと見ることができ。これを復原すると、12頁に示す【表6-4】となる。

次に、高遠集外題本のうち、錯簡が比較的単純な第三括(【表4-2】)から見ていく。現在は四紙八丁からなり、問題となるのは、次の四箇所である。

① 十五丁表と裏の不連続

② 十六丁裏から十七丁表への不連続

③ 二十丁裏から二十一丁表への不連続

④ 二十二丁表の後半から裏の白紙部分

このうち④については、この第三括が高遠集外題本の巻末にあたるため、二十二丁表は484番詞書と歌の五行で終えて残り五〇六行分を白紙とし、その裏面も白紙で巻末の遊紙となっているように見える。ところが、和泉式部統集は全六百四十七首の和歌があり、この484番は巻末歌ではない。直後の485番を含む丁は今のところ確認されていないが、この続きにあたる490番からの丁が大式三位集外題本に見えるので、485番からも和歌があったはずである。485〃489番の間の本文は今のところ確認がなく、和歌一首二行書の書写形式に当てはめて試算すると十六行に相当する。伝西行筆和泉式部統集は現在確認されている限りにおいて、一面九〇十一行の書写であるから、十六行は一面と五行程度に相当し、現在は不明となっている箇所にはまる量である。二十二丁表の半分が空白であるのは、本来和歌があった箇所を切り取って別の紙を継いだものであろう。巻末のように見せるためであらうか。なお、後で述べるように、高遠集外題本には他にもこうして意図的に歌集としての外見を保とうとする箇所が複数見られる。

次に①については、十五丁裏から十六丁表が連続しているので、十五丁表には本来その直前の439番までの本文があったはずであるが、これを剥がすなどしてS(412)414番を貼り付けたものであろう。なお、ここには本来、437番歌下句〃439番、行数を試算して約十行(一面相当)の本文があったと考えられる。さらに前の437番歌上句までの丁が高遠集外題本第二括(十四丁裏)に見え、現存はしていないが、その間の本文の存在を想定できる。

②は、448番歌から452番までの本文が抜け落ちた形で続いている。このうち、450番詞書から452番歌までの本文は、先に見た大式三位集外題本第三括六十一丁裏(X)に見えており、一面分の本文をここに復原することができる。残る448番歌

から449番の本文は現在未確認ながら、現存続集本文から行数を試算して約十一行、つまり一面相当となる。したがって、ここに二面（一丁）分の本文を想定することができ、これにより錯簡前の状態を復原できる。同様に③についても、この間の本文は現存を確認できていないが、行数を試算すれば約二十三行となり、二面分と見ることができる。

こうしてこの高遠集外題本第三括も錯簡箇所や欠落した丁を推測してみると、元の状態から現状への過程が明らかとなる。現状においても十七丁から二十丁には錯簡や欠落はない。しかも、この四丁は第三括の中央の二紙に当たる。そのさらに外側の一紙へ移るところに②③に一丁ずつの欠落がある。つまり、②③に存在したはずの各一丁は綴じ目をはさんでつながっていた一紙であり、現状ではこの一紙が抜けているということである。そして、①と④はともにこの第三括の最も外側の一紙に加えられた変化であることは、先の【表4-2】で明らかである。これを復原すると、12頁に示す【表6-3】のようになる。

なお、十五丁表の一行目の始めには後人が三文字を書き加えるが、本文に似せた筆跡で一見すると気付かないようになっている。十四丁裏の後半から十五丁表の始めを示すと次のとおりである。^⑥

（高遠集外題本）

（榊原本番号）

世の中いとはかしきころをと

せぬ人に

よのなかはいかになりゆくものとてか

こゝろのとかにをとつれもせぬ

冬比人のこむとみえてあかし

つるつとめて

わかやとをかへやしてまし人をまつ

あはれみえてとあかしつること

みえぬまでまゝとろむことのかたければ

われもはかなきゆめをたにみす

↳ 14裏
↳ 15表

（437歌）
（412詞書）
（412歌）

一見すると、十四丁裏の最終行「わかやとを」歌（437）の上句は十五丁表一行目に下句が続いているように見えるが、本文を読むと意味を成さず、上句と下句の関係になっっていないものであることが分かる。十五丁表一行目の始めの三文字「あはれ」は墨色や筆跡が異なり、後人の書き加えたものである。榊原本続集と本文を比べると、十四丁裏は437番上句まで、十五丁表は412番詞書から始まっており、連続するものではない。榊原本続集で示すと、412番の本文は次のようなものである。

おとこのほかにとまりて夢にたにみえてとあかしつること、云たるに

みえぬまでまゝとろむことのかたければ我もはかなき夢をたにみす

高遠集外題本にはゴシック体で示した本文のみが見えている。この詞書「：夢にたに／みえて：」の間で改行して十五丁表の一行目としていたものであろう。しかし現状では詞書として字下げされた「みえて：」の上に「あはれ」を書き入れることによつて行の高さが歌と揃うため、高遠集外題本はこの行が詞書ではなく和歌の下句のように見えている。この状態では、筆跡を注視したり本文を読んだりしなければ錯簡に気づかない。一見したときに歌集として自然な体裁に整えるため「あはれ」を意図的に加えたものと見える。

また、この412番詞書最後の「と云たるに」を榊原本に比べて高遠集外題本が欠くのも、この観点から見ると、本来あったものを高遠集外題本が装訂を整える際に削除されたと見ることができないではないか。十五丁表一行目と二行目の間、つまり412番詞書と歌の間が不自然に行間が開いているのも、「と云たるに」とあったものを、「あはれ」を加えて下句のように作った際に削り消したのではないか。原本を見れば、何らかの形跡が認められるかもしれない。

続いて高遠集外題本第二括【表4-3】を見てみよう。七丁目から十四丁目までの八丁、四紙から成る。問題となるのは次の五箇所である。

- ① 八丁表と裏の不連続
- ② 十丁表と裏の不連続
- ③ 十丁裏と十一丁表の不連続および歌順の逆行
- ④ 十一丁表と裏の不連続

⑤ 十三丁表と裏の不連続

このうち、①⑤については、先に見た大式三位集外題本第六括と同じような状況が考えられる。具体的には、①は八丁表裏の間に欠く384歌→388番まで、行数を試算すると十九行となり二面（二丁）分に相当する。つまり、現在の八丁表の裏面と次の丁の表面には本来384→388番の二面があり、さらにその裏面に、現在の八丁裏が続いていた、それを384歌→388番の二面を剥いで遊離させ、残った白紙の面を貼り合わせた想定できる。⑤についても同様に、十三丁表と裏の間には424→429番が不足している。このうち424→427番詞書は高遠集外題本第一括五丁裏（U）に見える。これは十三丁表の裏面にあったものを、表裏を剥いで五丁裏に移動させた結果と見ることができようであろう。残る427歌→429番は、一首二行で試算すると十一行で、二面分相当となる。よって、この十三丁の表裏の間には、やはり二面（一丁）分が抜け落ちた形となっているのである。この二面を⑤に補えば、現行十三丁表の裏面に424→427番詞書（U）、次の丁の表面に427歌→429番、その裏面に430番から（現在の十三丁裏）が続き、錯簡が修復される。しかも、①と⑤はともに、高遠集外題本第二括の第二紙目に起こっている。この第二紙目は本来二紙あったものの表裏を剥いで、内側のみをそれぞれ取り除き、残りを貼り合わせたものということになる。

②③④についても、やや複雑となるが、同じような事態が想定できる。先ず②について、これまで見てきた表裏を剥いだところに別の丁を貼り付けるという手法を応用して考えれば、現在十丁裏にある面（R）は、現在十丁表の裏面に本来あったものとは別のものということである。十丁表末は399番詞書であるので、裏面には本来399番歌からの本文があったと想定できる。そしてこの、399歌→401番歌の十一行は古筆切となって確認されている（P）ので、本来はこれが十丁表の裏面に位置していたと考えられる。続く402→404番詞書は現在の十一丁表に見えている。その続きにあたる404番歌からの本文は、今のところ古筆切の報告もなく、確認されるのは現在十丁裏の410→412番詞書である。この間に不足する404歌→409番を一首二行で試算すると約二十二行となり、二面分に相当する。本来はこの二面も存在したものであろう。現在の高遠集外題本では412番詞書（十丁裏）の次は③④

の間にある一面（Q）を挟んで415番（十一丁裏）まで本文が欠落しているが、この間の412歌→414番は、先に見た高遠集外題本第三括の錯簡①に見た一面分であるので、やはりここに復原することができよう。これを図示すると【表6-2】となる。この②③④は高遠集外題本第二括の第四紙目、つまり中央にある一紙に起こっている。②③④は本文の欠落に加え歌順の前後する箇所も見られるが、現在の状態に至るには次のような過程が考えられるだろう。【表6-2】の第五紙目（五丁・八丁）の表裏を剥ぎ、その内側の面はP・Sとして遊離させた。中央の第六紙（六丁・七丁）も表裏を剥がし内面を遊離（現存未確認）、そして残った第五紙の外側に第六紙の外側の面（R・Q）を貼り付けた。ただし、本来の歌順とは逆のR・Qの順に。その理由は、想像にはなるが、歌集として自然な体裁を意識してのことではないだろう。Q・Rの順に貼った場合、【表5】上段のようにQの末行404番詞書が行の半ばで終わったものが、R一行目410番詞書に続く形となってしまう。これでは本文に乱れのある集であるということが本文の内容を読まずとも明らかで、一見しただけでも錯簡の可能性をうかがわせるものとなる。【表5】下段のようにR・Qの順に貼れば、R末行は詞書であるが行の下まで文字があるため、綴じ目をはさんでQ一行目の詞書へ連続しているかのように見え、この問題を回避できる。この当否はともかく、これで高遠集外題本第二括目の六紙十二丁分、375→437番上句についても綴葉装の形で復原できた。

次に、高遠集外題本第一括目【表4-4】。分量は六丁と他より少ないながら錯簡は最も複雑で、連続した丁がほとんどない。錯簡箇所は次のとおりである。

- ① 二丁裏（313→315）の表面（二丁表）が白紙
 - ② 三丁表と裏の不連続
 - ③ 三丁裏と四丁表の不連続
 - ④ 四丁表と裏の不連続
 - ⑤ 五丁表と裏の不連続
 - ⑥ 五丁裏と六丁表の不連続
 - ⑦ 六丁表と裏の不連続
- 順に錯簡を復原してみよう。①は現在、高遠集外題本の冒頭部分であるため一

【表 5】RQ の貼り付け順による違い

R (410～412 詞書 1 行目)	Q (402～404 詞書)
<p>くれにこんといひたる男に おほろけの人はこえこぬくみかきを いくへしたらんものならなくに</p> <p>(中略)</p> <p>人のもとより道にと、むへきか たのなればた、に聞事と 云たるに</p>	<p>八月はかりよひとよ風ふきたる つとめていか、といひたる人に をき風につゆふきむすふあきのよは ひとりねさめのとこそさひしき</p> <p>(中略)</p> <p>男のほかにとまりてゆめにたに</p>
Q (402～404 詞書) 11 表	R (410～412 詞書 1 行目) 10 裏
<p>くれにこんといひたる男に おほろけの人はこえこぬくみかきを いくへしたらんものならなくに</p> <p>(中略)</p> <p>人のもとより道にと、むへきか たのなればた、に聞事と 云たるに</p>	<p>八月はかりよひとよ風ふきたる つとめていか、といひたる人に をき風につゆふきむすふあきのよは ひとりねさめのとこそさひしき</p> <p>(中略)</p> <p>男のほかにとまりてゆめにたに</p>

丁表から二丁裏は遊紙で二丁裏から本文が始まる。しかし、その二丁裏は313番から始まるので和泉式部続集の冒頭部分ではなく、312番までの本文が本来は現在の二丁裏の表面に存在したはずである。それを探すと、大式三位集外題本六十二丁表に310～312番(B)が貼られているのは先に見たとおりである。

②については、三丁表316～318番詞書の裏面にあるはずの318番歌は、大式三位集外題本五十八丁表に318歌～320番(D)が見える。続く321番からの本文は現存を確

相当である。

⑤の直後、五丁裏(424～426詞書)は、先に第二括を見た際、十三丁表(422～423)の裏面に本来続くものであることを確認した。この表裏が剥がされ、同じく表裏を剥がされた五丁表(370～373)に貼り付けられたものである。

⑥の、六丁表(339～342)と六丁裏(347歌～349)の二面については、③の部分に述べたのでここには繰り返さない。

認できないが、327～330番は古筆切(E)が確認できる。その間321～326番の行数を試算すると約十九行となり二面分に相当するので、本来はこの間も丁が存在したものと見ることができる。なお、このうちの325～326番については伝西行筆和泉式部続集の古筆切として六行分の翻刻が伊井春樹氏により紹介されている。⁽⁷⁾

③は先に見たように、大阪市立大学学術情報総合センター森文庫の所蔵本や、岡山大学附属図書館池田家文庫の所蔵本など、高遠集外題本の転写本から一紙四面分の本文が補える。ただし、こうして補った中にも338番の次に350番がくるといふ不連続が見られる。この間の339～342番については同じ高遠集外題本第一括六丁表(H)に、347歌～349番については同六丁裏(I)にある。その間の343～347番詞書は古筆切等の確認はできないが、行数は約二十一行と試算でき二面分に相当するので、本来は存在したことが想定できるものである。

④に不足する356歌～366番のうち、364歌～366番は十行分一葉の古筆切(L1)が現存している。残る356歌～364番詞書は約三十二行となり三面分

【表 6-3】原続集第8括(現高遠第3括)

(紙数)	(歌番号)	(現状)
第1紙	1 表	437下-439 約10行(1面相当)
	1 裏	440-442 W)15ウ
	2 表	443-445 W)16オ
	2 裏	446-448詞 W)16ウ
	3 表	448-449 約11行(1面)
	3 裏	450-452 X)三位61ウ
	4 表	453-455 Y)17オ
	4 裏	456-458 Y)17ウ
	5 表	459-460 Y)18オ
	5 裏	461-462 Y)18ウ
	6 表	463-465 Y)19オ
	6 裏	466-467 Y)19ウ
	7 表	468-469 Y)20オ
	7 裏	471-472上 Y)20ウ
	8 表	472下- ? 約23行(2面相当)
	8 裏	? -477上
	9 表	477下-480 Z1)21オ
	9 裏	481-483 Z1)21ウ
	10表	484-5行白 Z1)22オ
	10裏	? -489 485-489約16行(1面半相当)

【表 6-1】原続集第6括(現高遠第1括)

(紙数)	(歌番号)	(現状)
第1紙	1 表	310-312 B)三位62オ
	1 裏	313-315 C)三位2ウ
	2 表	316-318詞 C)三位3オ
	2 裏	318-320 D)三位58オ
	3 表	321- ? 321-326約19行(2面相当)
	3 裏	? -326 325-326の6行は古筆切E1
	4 表	327-330 E2)古筆切
	4 裏	331-333 F)3ウ
	5 表	334- ? G)転写本に有
	5 裏	? -338
	6 表	339-342 H)6オ
	6 裏	343- ? 約20行(2面相当)
	7 表	? -347詞
	7 裏	347-349 I)6ウ
	8 表	350- ? J)転写本に有
	8 裏	? -354詞
	9 表	354-356詞 K)4オ
	9 裏	356- ? 約32行(3面相当)
	10表	? - ?
	10裏	? -364詞
	11表	364-366 L1)古筆切
	11裏	367-369 L2)4ウ
	12表	370-373詞 L2)5オ
	12裏	373-375詞 M)三位57ウ

【表 6-4】原続集第9括(現三位第6括)

(紙数)	(歌番号)	(現状)
第1紙	1 表	490-494 Z2)三位54オ
	1 裏	495-499 Z2) ウ
	2 表	500-502 Z2)三位55オ
	2 裏	503-505 Z2) ウ
	3 表	506-508 Z2)三位56オ
	3 裏	509-510 Z2) ウ
	4 表	511-513 Z2)三位57オ
	4 裏	514-516詞 Z3)三位58ウ
	5 表	516-519 Z3)三位59オ
	5 裏	520-523 Z3) ウ
	6 表	524-526 Z3)三位60オ
	6 裏	527-529 Z3) ウ
	7 表	530-533詞 Z3)三位61オ
	7 裏	533-535 Z4)三位62ウ
	8 表	536-538 Z4)三位63オ
	8 裏	539-541 Z4) ウ
	9 表	542-545 Z4)三位64オ
	9 裏	546-547 Z4) ウ
	10表	548-550 Z4)三位65オ
	10裏	551-552 Z4) ウ

【表 6-2】原続集第7括(現高遠第2括)

(紙数)	(歌番号)	(現状)
第1紙	1 表	375-378 N)7オ
	1 裏	379-381 N)7ウ
	2 表	382-384詞 N)8オ
	2 裏	384- ? 約19行(2面相当)
	3 表	? -388
	3 裏	389-391 O)8ウ
	4 表	392-393 O)9オ
	4 裏	394-396 O)9ウ
	5 表	397-399詞 O)10オ
	5 裏	399-401 P)古筆切
	6 表	402-404 Q)11オ
	6 裏	405- ? 約22行(2面相当)
	7 表	? -409
	7 裏	410-412詞 R)10ウ
	8 表	412-414 S)15オ
	8 裏	415-416 T)11ウ
	9 表	417-418 T)12オ
	9 裏	419-421 T)12ウ
	10表	422-423 T)13オ
	10裏	424-427詞 U)5オ
	11表	427-429 約11行(1面相当)
	11裏	430-432 V)13ウ
	12表	433-434 V)14オ
	12裏	435-437上 V)14ウ

※現存しない箇所には色を付け、榊原本の本文から試算した伝西行筆本の行数を現状欄に示した。

現在ばらばらになっている各丁をこのように歌の順に並べると、一丁ずつを【表6-1】のように復原することができる。六紙十二丁で一括を成していたものと考えられる。このうち第三紙については四面とも散逸し、今のところ古筆切としても確認できない。第五紙は唯一その表裏を剥がれることなく高遠集外題本に綴じ入れられたが、損傷がなかったゆえか、その後切り取られることとなり、現在は転写本にのみ本文を伝えている。

なお、見てきた錯簡のうち、第一括の②④⑦・第二括の⑤については、清水文雄氏は「前丁の裏と後丁の表との二面に書かれた分量の本文が、それぞれ脱落していることを知る」⁸⁾と、この不連続が丁の綴じ誤りや切り取りによるような錯簡ではなく、連続する丁の内側の二面が欠脱していることを、早くに指摘しておられる。ただし、これは大式三位集外題本が公開される以前の指摘であったため、その原因について「前丁と後丁とが合はさつたまま写されたあるいは複製された」ために、必然的に内側の二面を飛び越えて、前丁の表の本文に後丁の裏の本文がそのまま接続することになり、その結果本文の連続に不自然さを生じたのではあるまいか。これは原本にすでに見えてゐた現象であるといふよりも、複製に当たつて、適宜中間部が省略されたといふ見方も可能である」とされる。しかし、この間の本文は、第一括②の間には大式三位集外題本五十八丁表や古筆切(E2)、④の間には古筆切(L1)、⑦の間には高遠集外題本六丁表(H)裏(I)、第二括⑤の間には高遠集外題本五丁裏(U)など、それぞれの欠脱部分の一部は、別の箇所や古筆切として現存が確認できる。したがって、書写の際に丁をめくり誤ったり、複製の際に中間を省略したりしたものではなく、表裏を剥いで一面ずつを分離させた結果と見るのが最も妥当であろう。

五、まとめ

以上、大式三位集外題本・高遠集外題本、その他一葉ずつの古筆切となったものの、さらには転写本に残された本文と、現存しない箇所については一首二行書きで一面九〜十一行詰の書写形式に換算して、伝西行筆和泉式部続集の復原を試み

た。伝西行筆和泉式部続集は現在のような錯乱をきたす以前は、【表7】のような状態であったと考えられる。全百二十丁、五または六紙を一括として全十一括から成る。⁹⁾

【表7】

伝西行筆和泉式部続集の錯簡以前の状態

(原続集)	(歌番号)	(紙数)	(現在の状態)
第1括	001-043	5	三位第1括
第2括	044-109	6	三位第2括
第3括	110-191	5	三位第3括
第4括	192-241	6	三位第4括
第5括	242-309	6	三位第5括
第6括	310-374	6(現3)	高遠第1括
第7括	375-437上句	6(現4)	高遠第2括
第8括	437下句-489	5(現4)	高遠第3括
第9括	490-552	5	三位第6括
第10括	553-606	5	三位第7括
第11括	607-647	5	三位第8括

なお、伝西行筆和泉式部続集がもと一帖であったか二帖であったかは、今のところ断定し得ない。清水文雄氏は、これについて次のように述べられる。¹⁰⁾

もともと完本として、しかもその分量から推して、おそらく枳形本上・下二帖として存在したであらう

一方、吉田幸一氏は、

伝西行筆本は、原一帖だった可能性大である。全歌数六四七首、墨付一一三丁と推定される。(その理由は、大式三位集外題本は墨付二〇―八四ウ計八二丁にまで四七八首。高遠大式集題籤本は、墨付二ウ―一二オまで計二〇丁に一一三・五首〔断簡・切取一六首を除く〕合計五九七・五首、一〇二であることから推して、原一一三丁前後か)。これが一帖か二帖かは、例えば、定家本『秋

篠月清集』上帖一〇二丁、九九五首。下帖一一五丁、六五三首があることから推して、原一帖の可能性が大である。もし原上下二帖だったとすれば、折半に近い所の分量で二分割されていたと思われるから。

と指摘される。『秋篠月清集』を引くまでもなく、伝西行筆和泉式部統集と同筆の冷泉家時雨亭文庫蔵『散木奇歌集』^⑪は全三百十八丁、十六括を一帖としており、伝西行筆和泉式部統集の百二十丁を一帖とするのが不可能ではないことは明らかである。

しかし、だからといって二分割されていなかった証拠とはなるまい。例えば、先の【表7】を数字だけで見ると、一〇五括、六〇十一括をそれぞれ上下巻とすれば、上巻五十六丁、下巻六十四丁のほぼ折半に近い量とすることができる。第六〇八括は高遠集外題本となっている箇所である。ただし、以上見てきた中では、五括目と六括目の間に遊紙などの丁数は想定していない状態で榊原本統集の歌順に復原できている。とすれば、ここには括の切れ目は確認できても、遊紙や表紙となる丁は想定できず、定家本私家集によくあるような、表紙や遊紙を伴った形での巻の分割も現段階では確認できない。その点から、一帖であった可能性の方が、二帖であった可能性よりも高いと言える。

以上はすべて写真版によって考察したものであり、原本に当たる機会を得たなら、あるいは新たな古筆切が出現すれば、また明らかになることがあるかもしれない。ともあれ、現在確認できる範囲の資料でも伝西行筆和泉式部統集は、榊原本の歌順に並べたとき特に大きな矛盾の生じる箇所はなく、一丁ずつ各括の様子までを見ることができた。既に先学により確認されている本文の異同とあわせて、伝西行筆統集が現存統集の祖本であること、榊原本をはじめとする統集が祖本たる伝西行筆統集を過不足なく確実に書写したものであることが確認できたと考える。

注

- (1) 吉田幸一『和泉式部集定家本考 上下』（古典文庫・一九九〇年）。ここには大式三位集外題本と高遠集外題本が全丁カラー写真で収録される。ただし、高遠集外題本については田中親美氏の複製の写真である。
- (2) 吉田幸一『和泉式部全集 資料編』（古典文庫・一九六六年）
- (3) 例えば『更級日記』は、現存諸本の祖本である御物本の錯簡を復原することにより、本文の混乱を解消したのはよく知られている。橋本不美男『原典をめざして』（笠間書院・一九九五年新装版）
- (4) 清水文雄「伝西行筆和泉式部統集零本について」（山岸徳平先生をたたへる会編『山岸徳平先生頌寿 中古文学論考』・有精堂出版・一九七二年）。その後清水文雄『和泉式部研究』（笠間書院・一九八七年）にも収録、『和泉式部歌集の研究』（笠間書院・二〇〇二年）「第二編第三章 伝西行筆和泉式部統集零本」に加筆して収録される。
- (5) 日本古典文学影印叢刊十四『物語二百番歌合 風葉和歌集桂切』（貴重本刊行会・一九八〇年）、藤井隆解説。
- (6) 伝西行筆本には他にも書き入れがあるが、ここに示した本文には省略している。
- (7) 伊井春樹『古筆切資料集成三 私家集・詠草』（思文閣出版・一九八八年）
- (8) 清水文雄『和泉式部集の研究』（笠間書院・二〇〇二年）「第二編第三章 伝西行筆和泉式部統集零本」
- (9) 例えば、先に挙げたように錯簡の復原により矛盾なく本文が読めるようになった定家の筆になる御物『更級日記』は、やはり五または六紙を一括とした全十括から成り、同じ程度の分量である。
- (10) 注8論文。ただし、上下二帖という件については、この論文の改定前にあたる「伝西行筆和泉式部統集零本について」（山岸徳平先生をたたへる会編『山岸徳平先生頌寿 中古文学論考』・有精堂出版・一九七二年）も同文。
- (11) 冷泉家時雨亭叢書第二十四巻『散木奇歌集』（朝日新聞社・一九九三年）